

# V.V. と玉城の完結した 在り方

夜半の月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

弟の心が離れたと感じ全てを投げ捨てたV・Vと、ブリタニアの日本侵攻で全てを喪った玉城がゲッターで出逢った。喪った者同士の心は引き寄せ合いそして。

pixiv様にも投稿しております。

御批判、御批評、御感想、遠慮なく頂けると嬉しいです。

# 目次

V・V・と玉城の完結した在り方

1

僕からキミへ

46

玉城のお誕生日と冒険の前の恥ずかしい

話

56

柏餅&愛し合う 一路キユウシユウへ

67



## V. V. と玉城の完結した在り方

V. V. と玉城の完結した在り方

「V. V.、V. V. それっ、それよそれ、その9パーのヤツっ、くれくれ！」

六畳一間。シンジユクゲットの小さなアパートに男の大きな声が響き渡る。

威勢良く逆立てた茶の短髪に顎髭を蓄えた赤いバンダナのその男。

上は紫のシャツ、下は青のジーンズで身体にフィットした服装の男玉城真一郎は、左手に空になったチューハイ缶を持ちながら次をと要求していたのだ。

「9パーもなにも此処にはストロングしかないじゃないか」

やれやれ。呆れた様子で応じるのは表地が黒、裏地が紫の踵まで届く裾のマントを着。

何処かの宗教指導者が身につけるような、両手両脚の裾部が青、それ以外の全体の生地が純白の、上下法衣服にも司祭服にも似た衣服を着こなす、足首踵にまで届く淡い金

色の髪が特徴的な少年V・V・だった。

厳密には少年では無く少年の姿、身体的年齢が10歳ほどで止まっている特殊な事情を持つ六十代の男性なのだ。

少年と言えは少年であり、同時に大人と言えは大人の思考を持つ、なんともちぐはぐな少年なのだった。

「おうつ、やつすい給金しか得られねえ、そもそも金が手に入りづれえイレヴンが、いや日本人がよ。安酒で酔っ払うにやなあ、ストロングしかねんだよお」

「まあ言われてみれば確かにそうなのかも知れないね。あ、僕のもカラになっちゃった」  
「カラになったら遠慮せず次いけ次つ、お互いにもう一杯完敗と行こうぜ！ の前にこっちももう無くなってるんだから次の早く取ってくれよ」

「自分で手を伸ばせば取れるじゃないか」

六畳一間と狭い部屋なのだ、身体ごと手を伸ばせば十分と届く距離にアルコール度数の高めな酎ハイ缶は置いてある。

冷蔵庫から出してよりまだそれ程の時間も過ぎていない為、ひんやりと冷えたままの状態の物が。

「あのない、俺はV・V・に手ずから取って欲しいんだよ、わかれやそのくらい」  
手ずから欲しい。それが自分たちの在り方なのだろう。

自分たちの間柄は何だ？　そう問われればありふれた答えが待っているのだ。

「俺とV・V・は特別な仲なんだからよ、特別には特別が付いてくるもんだろ？」

そう熱く語る玉城に。

「はいはい分かったよ、分かりました。僕と真一郎の仲だものね。でもただ物を取る一つにまで特別を要求するのかい？」

「おうよ！　だつてよおV・V・。俺たちの仲じゃんかよお、そんなつれない態度取るなよなあ。俺はV・V・の手で取られた酒が飲んでーんだ」

「うーん、そんなこと言われると照れちゃうなあもう」

観念。そんな風に言われたら従わざるを得ないじゃないかと微笑むV・V・は、手を伸ばせば直ぐに届く距離のレモン缶チューハイを取り。

自身に取つてこの世で一番大切な存在である玉城の目の前に座り込むと、手にした缶酎ハイを彼に手渡ししてあげた。

「はい、どうぞ」

「ありがとなV・V・！　愛してるぜ！」

受け取つた缶酎ハイを手に玉城はV・V・を抱き締めた。

「んっ、ちよつと、真一郎」

真正面からの抱擁だ。優しくも熱い抱擁だった。

腰を下ろしていることで畳に広がっているマントの裾と淡い色をした長い金髪が波打ち。表地が黒で裏地が紫色をした夜の色の様なマントの生地が玉城の指に圧されて皺を刻む。

V. V. を抱き締める玉城の指には V. V. 自身の身長ほどもある長すぎる綺麗な金髪が絡みつき、玉城の手指をさらさらと撫でている。

「V. V. ……いつも俺の、俺なんかの傍に居てくれてありがとな」

僅かばかり見開かれながらも潤う V. V. の紫色の瞳が揺れた。

「馬鹿……、そういうの反則だぞ？」

「いいじゃんかよ。嫌か？」

「ううん、嫌じゃないよ……、キミこそ僕の気持ちを分かりなよ。キミと僕は永遠を誓い合った者同士なんだからね」

「それが分かってるからこうしてるんだぜ？」

「ああ、それもそうか……嬉しいよ真一郎。いつも僕の傍に居てくれてありがとう」

玉城に抱き着かれてはにかむ V. V.。心から嬉しかった。ああ、この子はいつもの事を想ってくれているんだと伝わってくる。

今に始まった仲では無い、もう何年も前からこうして寄り添っているから彼の気持ちは自身が一番知っている。それでもいつも改めて嬉しくなるのだ。これほどまでに深



く想われていることを。

酔いも手伝いとでも気分が良いと思う彼も優しい抱擁を玉城に贈り返してあげながら、二人で温もりを分け合う。

V・V・には玉城が居て、玉城にはV・V・が居る。互い以外を必要としない完結された二人は優しい想いを込めて互いを抱き合い。

そうして静かに身体を離す。

「もう少し抱き合っていたいけど……でもそれだとお酒が進まなくなるもんね、……それじゃあ、飲もうか」

抱擁を終えたV・V・は酔いとは違う意味で頬を赤らめながら『後でもう一度抱き締めてくれる?』と可愛らしく問いかけ、玉城との抱擁の終わりに名残惜しさを覚えつつも自分も缶酎ハイを手を取った。

「ああ〜なんかV・V・の温もりでエンジン掛かってきた感じがするわつ、よしつ、V・V・よお、今夜はとことん飲むぞっ!」

「うん。僕もとことんお付き合いするよ」

その少年いや男性V・V・を前に次の酒、次、次、と遠慮も無く要求し、熱い静かな抱擁を以て心を満たし合わせた玉城は暖め合った心をそのままに乾杯の音頭を取った。

V・V・と玉城、二人の関係。

気軽に名を呼び合い、気軽にお酒を酌み交わし、気軽に互いを触れ合う。そして生活を共にしている互いが互いに無くてはならない大切な者同士。それはかなり特殊で複雑、それでいてシンプルで素敵な間柄にある相手同士だった。



事の始まりはもう何年も前のこと。

元はギアス嚮団という組織の長を務めていた少年の姿をした壮年男性V・V。彼は大層弟思いの人物で、弟を溺愛していた。

しかしある時、弟に本心から愛する女性が現れたことで、通い合っていた筈の兄弟の心に隙間が生まれたと感じ始めたのだ。

自分は弟の全てを知っている、弟には自分しかいない。お互いさえ居ればいい。

それで完結していた……。その筈なのに、弟は他者をその心に迎え入れた。

弟を第一に、弟と共に、弟と二人で、この嘘に塗れた世界から嘘を無くし、嘘の無い世界を作ろう。

そこまで考えていた、深く溺愛し約束を立てていた弟の心が別の誰かに染め上げられていく事。

ある日、これを自身への裏切りと断じて心を苛み始めた孤独感と苦痛に耐えきれなくなったV・V・は、弟の下を自ら去るといふ決断を下し、組織のことも全て放り投げて極東のある島国日本へと流れ着く。

何処かへ行こう。ただそれだけを考えて旅をし、気が付いたときには祖国との戦争により焼け落ちた、敗戦間もないこの国に居た。そんな感じだ。

そこで、その国で、彼は一人の男。当時はまだ十代だった、元は高校生だったという子供よりかは大人寄りの、青年前の少年だった頃の彼、玉城真一郎という男と出会ったのだ。

『どうしたのキミ、一人なのかい？』

『誰だよガキ、お前ブリキか？ そんな上等な服着てるって事はブリキのお貴族サマのお坊ちゃんか？ ブリキがイレヴンに何か様かよ』

『うん……寂しそうな顔をしていたからね、何となく……。僕は別に貴族じゃ無いよ。いまはただの放浪人さ……。実は僕もひとりぼっちでね、ああ……そうだね、なんだかキミの姿が僕に似ているなと思ってつい声を掛けてしまったんだ』

『お前も一人なのかよ……親とかはどしたよ？ うちの日本軍にやられてくたばったか？』

『ううん、元々居ないよ。そんなもの、ずーっと昔に死んじゃったから……。ねえ、キミ

に付いてつてもいい?』

『ああ、なんだって俺に?』

『だって、キミは一人、僕も一人、……ひとりぼつちは寂しいんだ……、ひとりぼつちの先達だと思ふ僕が保証するよ……本当に寂しいんだよ』

ひとりぼつちは寂しい。簡単な話でその通りだった。

寂しげに微笑む少年を見て胸が疼く日本人の、イレヴンの少年は。

『そうだな……、一人は寂しいよな……、騒げないし、遊べないし、つまんねーし……』  
言われた少年も自分も一人だったからこそ、示されたひとりぼつちの寂しさの意味を理解できた。

『うん、だから一緒に居ようよ。そうすればひとりぼつちじゃなくなるよ。孤独な者同士、僕らは気が合うと思うんだ』

だから一緒に居ようと申し出ていたV. V.:

『ははっ、いきなりだなおい』

『僕の名前はV. V. だ。キミは?』

『ぶ、ブイ、ツー? 変わった名前だな……。俺? 俺は玉城……玉城真一郎』

『一応自己紹介がてらとして、V. V. はこんな字だよ』

V. V. は小さな手で木っ端を拾い、地面にV. V. と字を書いていく。

『Vに、を併せて二つくつつけてV・V・か、やっぱ変わった名前だな』

『まあ色々と訳ありでそんな名前なんだ。タマキ・シンイチロウ……、キミはどんな字だ  
い？ 日本語は漢字名だよね』

『ああ、玉城は……、てかブリキ……外人には説明しづれえな』

彼は近くに落ちていた石を拾うと、爆撃でめくれ上がった道路だった場所の地面の土に和名、日本名を書く。

通りには誰も居ない、閑散とした廃墟群と荒れた地面が広がっている。

そこで幼い少年と高校生だった少年は互いに向き合い、互いの名を交換していた。  
がりがり、土の表面に描かれていく漢字の名前。

『これが俺の名前だ』

そこにはV・V・と書かれた字と並ぶ形で、玉城真一郎と書かれていた。

『ふんふん、丸い玉の玉にお城の城、真っ直ぐの真に数字の一、そして生まれた順序に添えて表す字であり中華の官名にもある郎か』

『なんだよお前っ、すっげー頭いいんじゃないっ、郎の字にそんな意味があるとか知らねえしっ』

『育つてきた環境上教養はそれなりにある方かな。まあキミの名の郎は官名からじゃなく一郎とか太郎とかそういう意味での郎だと思っけれどね』

そうして出逢った二人。幼い少年の風貌を持つ男と、青年にならんとしている少年。二人の出逢いは必然だったのか。名を交換し合つてより二人は一緒に行動し始めるのだった。

V・V・ から見た玉城真一郎という少年は、やんちゃで粗暴、でも底抜けに明るくて調子乗り。正しく適当人間だった。

その男に、堅い生活の中で生きてきて、堅い人間だった弟と付き合つてきた、そんな自分自身の人生とは逆位置に立つ彼に。

次第にV・V・ は興味を抱き始め、数ヶ月をブリタニアに占領された後のゲッターで共に過ごす間に彼の傍で寄り添うようになっていた。

どうしてそうなったのか。

そんなの今でも分からない。

ただこの子と一緒に居たら楽しそうだな。

そう思ったのだ。

玉城真一郎、彼は彼で学生生活を送っていた中、突如として始まった日本とブリタニアの戦争で親兄弟と友人を喪い。

たった一人で侵略国ブリタニアへの恨みや憎しみ、やるせなさを胸に抱きながらゲッターと呼ばれるようになった地域で細々とした日々を生きている中。

偶々声を掛けてきた黒いマントと白い衣服に身を包んだ足首にまで届くほどの淡い色をした長い金髪と、紫色の双眸が特徴的な不思議な少年と出逢った。

名をV・V・V・といった。初めてその名を聞いたとき、正直なところ変な名前だと感じた物だった。

Vに、を添えた文字を二つくつつけただけの名前だという。

日本人の容姿とは明らかに異なる外国人の少年ながら、何処の国の名にもあり得なさそうな不思議な名前の響きと、齢10歳前後としか見えないながらも大人びた様子。

一方で無邪気な面を併せ持つ不思議な彼に対し、何処かしら惹かれるかのように行動を共にするようになっていた。

当時はまだ高校生の頃、敗戦間もなくイレヴンと呼ばれるようになった元日本人に対してブリタニアの貴族かお坊ちやまがお遊びがてらにゲッターに來たのかと訝しんでいたが。

しかしそんな彼に、『キミ、一人なのかい?』そうして声を掛けてきて『僕も一人なんだ』と寂しそうでいて虚無感に苛まれている雰囲気を持つ彼に、コイツは他のブリキ共とは違うと感じて歩み寄ったのだ。

ひとりぼっちとひとりぼっち。

寄る辺の無い者同士だった。

片や大切な弟と通わせ合っていた心を喪った喪失感に苛まれる少年。

片や家族と友達を戦争で喪ってしまいひとりぼっちになってしまった少年。

ある意味において孤独という名の檻を持つ似た者同士。

打ち解けるまでにそれ程の時を要さず、玉城が住んでいたゲットーの古びたアパートの一室で二人は共に暮らすようになっていた。

最初はお互いに友達だったのだと思う。V. V. も玉城も、信頼関係はあったが普通の友達だった。

出逢つて間もない間に友達となったというのは子供の頃を置いて互いに無かったのかも知れない。

V. V. は玉城に友情と信頼を寄せていたし、玉城もV. V. へ同様の感情を抱いていた。

もうひとりぼちな孤独人間じゃ無い。

僕には俺には共に居てくれる相手が出来た。

毎日が楽しかった。

焼け落ち壊れたゲットーでただ静かに過ぎていく毎日を、この幼い姿の男性と、このまだ活発で思春期たつぷりな少年。

互いに暮らすようになってからは持ち合わせていた孤独感が喪われていき、二人で居



ることの楽しさと幸せを満喫するように。

共に遊び、共に食べ、共に寝ては日々の生活に彩りを添えていったのだ。

ただ一緒に居れば良い。

ただ一緒に暮らせれば良い。

一人になりたくないから。

一人は嫌だから。

そんな思いの下に二人は寄り添い続けた。

毎日を毎日を、来る日も来る日も、時を忘れてただ生きて共に居ることを実感して二人は過ごしてきたのだ。

だがそんな状態はそれほど長くは続かず、次第にそれ以上を求めようになっていった。どちらがどちらでは無く、どちらともにならぬ。

真逆の生き方をしてきた二人は逆位置に居るからこそ一本線となって互いに親愛の情を抱くようになっていたのだろう。

日々はただ静かに過ぎていった。

少年姿のV・V・は玉城に対して嘘は吐きたくないからと唐突に実年齢を告げ、10つ程の年齢の頃に特殊な力を以て年齢が止まったのだと包み隠さず己の身の上を話した。

奇妙で信じがたい真実。あり得ない話。空想や妄想、SF小説にでも登場するような  
実年齢とV・V・の永遠という時間。

これを聞かされた玉城少年だったが、V・V・、彼が自分に嘘を吐くはずが無いとして  
その言葉を信じた。

そうなのか、道理で大人びてる訳だぜ。大人その物なんだからよ。そんなに簡単に信  
じがたい真実を受け入れられ。

『ふふふ、そんな事だとこの先生生きていく中で簡単に騙されるような人間になっちゃ  
よ』

話を真実として受け入れられたそのことに笑うV・V・だったが、嘘じゃ無いって分  
かるぜと笑い返してきた玉城に、弟に感じていた物と似たような感情が生まれたのは  
きつとあの時だろうと今でも振り返ることがあった。

その感情は同時に玉城少年も抱く物だった。家族全て、友達も全て喪い、たった一人  
になってしまった自分に新しく出来た、ただ一人の友人。

幼い姿をした自分よりも年上の友人に対しての頼りがいの思いや、親愛の情は日増し  
に大きくなっていったのだ。

ある時、V・V・は言った。

『ねえ真一郎。僕らは僕らだけで生きていこうよ。誰かを頼つても良いし、何処かに属

しても良い。でも僕らは僕らとして二人だけで生きるんだ。僕らは二人だけで完結するんだ』

友達も作って良い、いや寧ろ交友を広げて行っていいとも思う。

こんな世界だ。寄る辺の無い自分たちが二人だけで生きていくのは難しいだろう。でも、僕らは僕らだけを深く信じて、お互いだけは裏切らない。

何処にも行かず僕らだけで一緒に居よう。僕らだけで僕らの存在を完結させよう。

組織に属しても良いし、新たな友人関係を持つても良い。

だが必ず一線を引いて、そこだけは余人を立ち入らせない自分たちだけでの完結とさせよう。

酷く真剣で切実な感情だった。うんと言わせたい有無を言わさない感情がそこにはあった。

V・V・の喪うという喪失感と孤独が、強く玉城を求める感情に繋がったのだ。

玉城も玉城で考えた。この大切な友人、大切な存在、今の孤独だった自分にとって唯一となつた少年の事を。

この親友は親友を超えて心友になりたい。いやそれ以上を望んでいるのだろうか。

V・V・の独白に自然玉城少年は肯いていた。

『俺も、俺もよ、ずっとV・V・と一緒に居てえよ。俺、ひとりぼっちだしな……、家族

も友達もみんな死んじまったしき……、そんな俺にもお前つて奴が出来た。親友、いや心友……ああいや、それ以上の大切な奴だ。俺とV. V. の二人だけで完結する関係……そういうのもいいじゃねーか』

心が通い合った瞬間だった。いや元々通わせ合っていた心の結びつきが今までよりも強固な物となったのだ。

二人は静かにお互いの手を差し出し、手と手の平をそつと重ね合わせる。

それは儀式のようで、それは遊戯のようで、それは誓いを立てる証のよう。

『ふふ、ありがとう真一郎。僕らはずっと一緒だよ？』

『おう！ 雨の日も風の日も』

『太陽降り注ぐ暑い日も、鉄鑄の業火の中でも』

V. V. と玉城真一郎はずっと一緒に二人で生きていこう——二人だけで完結しよう。

そんな宣告を交わして微笑み合った。

お互いに浮かんでいたのは純粹な微笑みだった。

このいい加減なお調子乗りで、でも底抜けに明るくて自身の心を癒やしてくれる男

に。

この若い少年の姿をした不思議な大人の男に。

互いを全部さらけ出して二人だけで完結していこうと共に誓い合つたのだ。



それからの生活は少し変わったように思う。

少年姿のV・V・は仕事らしい仕事に就けない。

表地が黒、裏地が紫色をしたマントに、手足の袖口と裾が青、その他全体が白を基調とした見るからにして高級そうな衣服を身に纏う彼だが、だからといって特にブリタニアの貴族という身分を持つわけでは無し。

自然と普通の仕事にはありつけず、やれる事としたらブリタニア人であり外見も整っているため、疎開の中に自由に出入りしても誰にも文句は言われないからと疎開内部で色んな物を見聞きし、買い物などをするだけだった。

だからと彼は家事全般を不器用なりにも熟すようになり、家事や買い物、情報収集を請け負う形に落ち着く。

反対に玉城は戦前は学生の身分ではあつたが体格としては十分に大人として成熟し

ており、自然彼が外での仕事らしい仕事。稼ぐことをする。

V. V. が家事と買い物に情報収集で、玉城が一家の大黒柱のように労働をしてくる。

二人の役割分担はその様になっていった。

『ただいまーつと』

労働で汗を流した玉城が家に帰ると。

『お帰りなさい真一郎』

家事と買い物と情報収集を終えていつも先に家に居るV. V. が出迎える。

時にエプロン姿で。

時に彼自身の長すぎる淡い色の金の髪を後ろで一つに束ねて。

まるで夫の帰りを待つ伴侶のように。

とたとと掛けてきては玉城を出迎えるのだ。

出迎えられる玉城はそんな幼い少年の姿をした男性の色んな格好に何故か心が揺らされた。

可愛いし綺麗だと思った。絶世の美少年なのだからそう思ってもおかしくはないのだが、なんだか胸が締め付けられるような感覚を伴って。

玉城の心を温かく癒やしてくれたのだ。

お帰りと言われて嬉しい。

出迎えられるのが待ち遠しい。

だから一刻も早く家へ帰りた。

そんな玉城を出迎えるV・V・は、彼の姿を見掛けると嬉しくなり。

彼のことを考えながら日がな一日を過ごし。

彼が帰宅すると出迎えに出かける。

労働で汗にまみれた玉城を風呂場で洗ってあげるときなど、彼のたくましい身体を目にし、触れては、胸が締め付けられて。

何だろこの感じと何度も疑問を抱かされた物だ。

気持ちと気持ちがまた一段深く結びついて重なっていく。

心友以上の存在同士。

そう認識し始めるのに互いに時は掛からなかった。

V・V・は玉城を求め。玉城はV・V・を求め。二人は二人だけでいつも完結する。

朝食を共にし、一日の終わりを共に迎え、一日が終わると共に一室で夕飯を食べ、団らんの間にはお互いの事を語らう。

就寝の床は共にして、互いの温もりを肌で感じながら一日の終わりの眠りにつく。

そうしてまた新しい明日であり今日でもある日を迎え。

共に起床し、共に朝食を摂り、一日が始まりまた完結する。

無くてはならない存在であり、これからもずっと一緒に居続ける友達以上、親友以上、そして心友以上に大切な相手同士。

そんな関係に落ち着いていった。

玉城は仕事現場で嫌なブリタニア人監督や労働者等から罵声を浴びせられたり、差別されたりする毎日だったが、家に帰ると出迎えてくれるV・V・Vに癒やされ家庭的な温もりを感じ。

V・V・Vはいつも一緒に居てくれる、何処に居ても心は一つの約束と誓いを守ってくれる玉城への親愛の情が、家族愛から更に踏み出したところまで進んでいくことを感じた。

互いに互いが無くてはならない存在に。

どちらがどうでは無く、二人はほぼ同時にそうなっていた。

共依存、最初の頃はそれを疑った。

玉城は言葉で聞いたことがあり、V・V・Vは知識として識っている。自分達は今その関係にあるのか？

精神医学的には依存し合う状態を主に指し、自分達が今そうなってしまうのでは。



ひとりぼっちとひとりぼっちが出逢い、互いを必要とするのは似た境遇にあるから依存し合っているのではないのかと。

だがどうやら違うと感じたのは、いつもより遅く残業させられた玉城が帰ってきたときの事。

いつもより帰ってくるのが遅いと心配していたV・Vが、玉城に抱き着いたときだった。

この日この瞬間をこの直後より後々二人は『運命の時・完結と始まりの時だった』と受け取るようになっていた。

その運命の始まりはV・Vの、幼い少年の側よりの抱擁から始まったのだ。

『真一郎、僕……心配したんだよ？ キミが酷いことをされていないかって。ブリタニア人の僕が言うのもおかしな話だけれど、ブリタニア人はキミたちナンバーズを自分たちよりも下に見ているから』

心から心配だった。差別の塊であり偏見意識の高いブリタニア人が玉城の事を虐めたりしてはいないだろうか。

殴られ蹴られ詰られとされていかないだろうか。いつも元気だけど実は空元気で、心に傷を負ったりして居ないだろうか。

V・Vは彼が大切だからこそ心の底から心配していたのだ。

『大げさだぜV. V.。それよりごめん……。お前が誰よりもひとりぼっちが嫌で辛いの知ってるのにこんな遅くなっちゃってさ……。ごめん、ごめんよV. V.』

玉城、彼は彼でV. V.が必要以上に孤独を嫌っていると知つていながら帰りが遅くなつてしまつた事を反省し、また悔やんでいた。

この大切な少年に寂しい思いをさせてしまつた。それが何よりも苦痛で、自分で自分が許せなくて。

ああ、俺は、僕は。

こんなにもお互いに離れられない、お互いを考えずには居られなくなつていたんだ。

それに気付いたとき、互いに無くてはならないという気持ちだが、共存といつた言葉ではもう片付けられないところまで来ているのだと気付いたのだ。

親愛？

それもある。

信愛？

それもまたある。

愛？

純然たる、純粹たる愛？

愛し合うという至高の感情の行き着く果て。

それが、それが最も相応しい感情と言葉なのではないだろうか。それに気が付いて、気付かされてしまったのだ。

互いが互いを必要以上に必要とし、離れた場所に居てもお互いを感じ合える間柄。

V・V・が心配で玉城が心配で、思うことはいつも同じ。

一緒に居たい。できればずっと離れずずっと一緒に。

正しくそれは愛という名の感情がもたらした心の情動だった。

V・V・は男で、玉城も男。男と男ながらも唯々純粹に心からお互いを愛し想う。

難解で、複雑。

特殊であり単純。

知らず互いを愛し合っていたのだと思ひ知らされた。

ほんの僅かな時間の狂いがお互いの想いに気付き至らせたのだ。

『な、なあV・V・』

玉城は自分にしがみつく幼い少年の頭に手をそつと添え、その淡い色をした金色の長い髪を優しく撫でながら尋ねていた。

『なんだい?』

『へ、変なこと聞くけどよ……、その……、男が男を愛するって……その、あのよ……、

あ、ありだと思ふか? そういうのつてき、あつていいと思ふか?』

尋ねづらそうで、でも勇気を振り絞って。

自分の感情に気が付かされ、思い知らされたからこそ玉城は思い切って聞いていた。この時を逃せばこれを問い質す勇気を発現できなくなると意識して感じていたからだ。

そうなればきつと一生後悔する事になる、そんな気がして。

『僕、も……、僕も、逆に聞きたい……、男が……、男を愛するつて……、変かな？……おかしなこと、なのかな？ 男が男を愛しちやいけないのかな……？』

V. V.、彼も尋ねづらそうで勇気を持ち紡ぎ出した質問だった。

こんな質問返しをしてもしも拒絶されたらどうしよう？

半世紀以上を生きてきて初めて必要とされた勇気のある質問だった。

だがこれを問い返さずには居られない。この場この時に置いてだけこれを問い質す最初にして最後のチャンスだと思ったから。

そして時計の針を進めたいと思うのだ。逆位置から重なる位置まで反転させたくなったのだ。

どちらもが思った、6時或いは18時の針の位置を、御前0時か午後0時に変えてしまいたい。重なり合わせた状態へと。

だからV. V. は玉城は、互いに互いの想いの在り方を問い質さずには居られなかつ

た。

その質問と意図は幾ばくの時も置かず、刹那の瞬間に重なった。

『あ、はは……、いや、変じゃないと、俺は思う。だってよ、世の中男と女が半分ずつだけだよ……男、半分も居るんだぜ？ ……そんだけ居りやあよ、そりや男に惚れる男だって居てもおかしくねえか？ 男が男に惚れたって良いじゃんか』

男は半分も居る。世界にそれだけ男が居るならばこそ、時に男が男に惚れることがあつても良いはず。

玉城はそう告げた。その思いが向かう先の相手に対して。

『ぼ、僕も……ありだと、思うよ……？ ……男が、男を、愛したっていいと思う。だって……、だって、誰かを愛するって気持ちは、性別なんかで判断できる事じゃ無いと思うから……、ひとの、思いだから……』

意図する想いと答え。自身が望んだその通りの答えを返してくれた玉城に対して紫色の美しい双眸を涙で潤ませながら、V・V・はただ思いの丈を解き放つ。

決壊の瞬間だった。

出逢つてからそれほど時を重ねた訳では無く、ただ互いが互いにならずと一緒居ようと誓い合っただけ。

自分たちは自分たちで、二人だけで完結するのだと約束を交わしただけなのだ。

それがどうだろうか、今は、今となつてはそれ以上を求めているのだから。

一緒に居るだけではもう満足が出来なくなつていた。

友達で居るだけではもう我慢が出来なくなつていた。

完結を正しく完結させ合い、互いを離れる物の無きように縛り付け合いたくなつていた。

何故なのか？ どうして？

それは互いの境遇と、逆位置の在り方が惹かれ合い成立させた心からの愛情が故だつた。

『ぶ、V. V. ……、気持ち悪い奴だつて、変な奴だつて蔑んでくれても良い。でも、駄目だ俺つ、V. V. のこと愛しちまつてるよ……ど、どうすんだよ』

怖々とした告白。締まらない気持ちの伝え方だつた。

ああ、そうだ。この男はこんな奴なのだ。こんなものだから放つて置けなくて、気が付いたら心を奪われていた。

僕だけを見て、僕だけを感じて、僕だけを想う、僕をひとりぼつちにさせたりしない……、そんな愛おしい人間だつた。

V. V. も応じる。この瞬間に相応しい在り方で。

嬉しくて、ただ嬉しくて、止まらない胸の内を。

V. V. の瞳から一滴の涙がこぼれ落ちた。

『ふ、ふふふ、それっ、それっ、それっ、僕の台詞だよ。僕も変だと思われても良いし気持ち悪いと思われて良い、誰にどう思われようとキミが、真一郎が好きだよ……、僕も、僕もキミを愛してるよ真一郎、キミを愛してるんだ!』

これも勇気が必要だった。拒絶されたらどうしよう。

弟の時のように他の誰かが現れたら僕は今度こそ壊れてしまう。

悩みに悩んで打ち明けた胸の内。

偽らざる正直な愛情をそのままに玉城へとぶつけたV. V.:

弟の時と一つ違いがあるとすれば。

それは弟に抱いていた思いが兄弟としての親愛の情だったのに対し。

玉城に対して抱いていたのは信愛を超えた恋愛感情であったこと。

『ぶ、V. V. も俺のことを? ま、マジか?』

『うん、うん、マジだよ? 本気だよ? 僕は真一郎の事を世界で、ううん、この世でもあの世でも、宇宙の果てでだって何処でだって一番愛してるよっ!』

互いの気持ち打ち明けた二人。

やり遂げた、完遂させた。初めて本当の意味で完結し始まった。

『胸が、胸がドキドキするね、嬉しくって涙がこぼれちゃう』

『お、おう……こう、胸が熱いわ。どつくんどつくんしてる……泣くなよ、泣くなよV. V.; お前、俺よりもずっと年上なんだろうがよ、こんなにも嬉しいときに泣くんじゃねえよ。そ、そっか、V. V. も俺のこと好きなんだ……そうか、そっかあ!』

玉城は確認を取りながらV. V. の目元に浮かんだ涙を拭う。

それでも潤んだ瞳からは次々と涙がこぼれ落ちて、紫色の美しい双眸を涙で濡らすのだ。

『泣くなつて馬鹿……こんなに嬉しいのになんでこんな、泣くんだよ……』

『好きだよ……好きなんだよ真一郎……、僕は玉城真一郎を愛してるよ……、でも、でも変だね』

男同士なのに。

しかし気持ちは偽れない。

溢れた水は返らない。

だから正直になろう。V. V. はそう思った。

そして出来れば真一郎にも正直になつて欲しいと乞う。

『ねえ、キス……しようよ?』

V. V. の頬を触りながらこの美しい少年の涙を拭っていた玉城。

V. V. は、彼は、完結を見たここから始めるために、自分の頬に触れている玉城の



右手をその小さな手の平で包み込み、前に足を踏み出す。

『き、キス?!』

そうだ、踏み出そう。この禁断にして真実の愛の果実を収穫するために。

完結させた関係を新しい関係として始めながらも改めて完結させるために。

『僕は真一郎とキスがしたい……、この瞬間という今を、愛し合つて完結させたいんだ

……、そうして始めるんだ。僕とキミの新しい今を』

そうV・V・は決めた。お互いを好き合っているのだ。男同士? そんなの関係な

いと。

好き合う者同士が好きなき持ちと愛する感情を重ね合わさなくてどうするのだ。

僕と真一郎の愛の邪魔は誰にもさせない、僕たちの邪魔をする者は許さないと思いな

がら。

『愛し合う者同士はキスをする物なんだよ。僕が真一郎を愛していて、真一郎が僕を愛

してる……ほら、さ。条件はもう、成立しちやつてるから、ね?』

頬を赤らめながらはにかみ、こてんと首をかしげる様に折り曲げたV・V・。愛おし

い真一郎と口付けしてみたい。小さく咲いた愛欲の我が儘だった。

純粹に愛を欲する言葉と態度だった。足下にまで掛かるほどのとても長い淡い色の

金髪が首の動きに合わせてさらりと流れる。

それが幼い少年の姿に妖しさを伴う妖艶さを浮かび上がらせ、愛する者の心に触れていく。

『で、で、でもよお、いきなりキスは、その、なんだ、ハードル高エンじゃねえ?』  
玉城は慌てふためく。

嬉しいか嬉しくないか。そんなこと決まってる、嬉しいに。

愛するV・V・にキスをしようと問いかけて嬉しくないはずが無いじゃないか。  
愛する彼からキスを求められる事が幸福感を覚えさせずに居られる物か。

だがいきなりの要求なのだ、愛すればこそ動揺も誘う。

『しよ? キス。初めてのキス……真一郎と僕との愛の証として、ししようよ? ねえ、し  
ようよキス』

可愛らしく迫るV・V。背丈の差でどうしても玉城の唇には自らでは届かない。

だから少し無理をしてみよう、思い切り背伸びをして玉城の首に腕を巻き付かせたの  
だ。

『ちよっ……!』

首に絡みつく腕。その両腕の何と小さく細いこと。

このか細い腕で自分に愛を求めてくる。

この少年の求愛行動、玉城にはそれがどうしようもなく愛おしいと感じられた。

『しようよ、キス……、ね？ したいんだ、愛を交わしたいんだよ……、お願い、真一郎……、僕を愛しているなら、僕を受け入れて……』

後は玉城が下を向くだけで良い。迫り来た幼い美貌に玉城の胸は高鳴り通した。

愛する者からキスをねだられるという初めての経験。

それは愛おしくて、切なくてそして、とても可愛かった。

V・V・はとても可愛くて美しかった。抜けるような白磁の肌、子供特有の幼さと美貌。

足首まで届く淡い色をした綺麗な金色の長い髪は月の色の様に眩く輝いていて。

夜の色を思い起こさせる黒と紫の色を持つマントに、星の輝きを纏うような白い衣服がとても似合っていて美しかった。

昔美術室で観た絵画のモデルよりも遙かに美しかった。

この世の美を凝縮させたようなそんな感じが眼前の幼い少年から漂っている。

この綺麗な少年の、この美しく可愛らしい男の唇にキスをしてしまっても良いのか。

自問自答の答え。それは、自分以外の誰がこの少年の唇に触れられるというのだろうかといった、至極当然の回答に突き当たる。

この美しい少年の想いに応えずして何が愛だ、何が愛おしい想い人だと。

この少年の唇にキスをしないなど許されるはずが無いのだとして。

V. V. からの求愛に応えないなど許されていいはずが無いのだから。

『綺麗だ……、すぐエ綺麗だぜV. V. ……、俺の愛おしいV. V. ……、俺も、お前とキスがしたい、V. V. ……、キス、しようぜ、V. V. ……』

『真一郎……』

無意識に下がる首。下を向く顔。この美しい少年に玉城は魅了され、V. V. の紫色の瞳が静かに閉じられる。

V. V. は待つ。愛おしい想い人からの口付けを、ただその愛を受け取り受け渡すため待つ。

『ん……』

瞬間、重なった唇。

一瞬感じた唇の冷たさ。

一拍置いた唇の温かさを互いに感じる。

『ん……、ん……』

ああ、この瞬間の何という幸せな事か。

これが存在を完結させる者同士の愛なのか。

完結し合ったまま再び始める歓喜の瞬間なのだ。

互いに互いを感じ合う。互いを求め合う。唇という僅かな接触面の感触だけが互いを満たしゆくのだ。

甘く甘露で芳醇な唇の味と香り。

そして温もりと湿り気。

幼い少年の小さな唇と、青年になろうとしている少年の成熟した大人の唇が優しく静かに重ね合わされていた。

静かで長い愛の口付け。

『ん、んっ……』

くぐもった声は互いの声帯より響き漏れた物。

V・V・の幼い声が玉城の耳を擦り。

玉城の男らしい声音がV・V・を感じさせる。

『ん……、ん……っ』

本能のままに、気持ちの赴くがままに。

小さな唇と大人の唇が、本来なら逆位置の年齢関係にある互いを啄む。

片方だけでは無い、相手を欲し、自分の愛も伝えるためだけに。

V・V・と玉城の唇は吸い付き重なり擦れ合わされるのだ。

『ふ、うっ……』

幼い少年の唇は甘く酸っぱく。甘露な味わい。

大人に近づいている男の唇のたくましさで力強さに酸いと甘さ。

V. V. の背中に感じる玉城の大きな手の平とたくましい腕の感覚。その腕に月の色の様なV. V. の長く美しい髪が絡みつく。

玉城の腕と手に絡みつくV. V. の髪、その下の黒いマントに玉城の指が押さえつけられてマントの生地が皺を刻んだ。

優しく力強く抱き締められるV. V. は玉城への愛情がどんどん大きく膨らんでいくのがわかった。

ああ、僕、愛されてる……、こんなにも真一郎に愛されているんだ……、幸せ、だよ……、僕も愛してるよ真一郎……。だから、だからずっと僕の傍から離れないで……、僕を離さないで……。

『ふ、あむっつ……』

V. V. の小さくか細い手と腕が首とうなじを擦り擦れ。心地良さを感じ。

小さな唇の温もりと甘酸っぱさ、そしてV. V. の唾液の味に、玉城のV. V. に対する愛が大きく花開いていく。

V. V.、好きだ……、友達だし親愛もある……、けどよ、今はもう好きって気持ちしかねえ……、もうV. V. のこと離したくねえ、一生でもこうしていてえよ……。ああ、

俺つてば、こんなにもV・V・のことを愛しちまつてんだな……。

二人は想い抱く。

こんな、こんなにも大きくて素敵な幸せと愛情があつて良いのだろうか。

想いを寄せ合う者同士の愛の口付けとはここまで甘美で幸福で、こんな味わいをずっと互いに抱かせ合つていたいなど。

自分が求め、相手も求める、愛を求め合うことの幸せ。

二人の互いを想う気持ちと互いへの独占欲が強くなつていく。

僕は真一郎を二度と離さない離すもんか。永遠に愛し続けるんだ。僕だけの真一郎なんだから。

俺はV・V・を愛し続けてやるっ。こいつをひとりぼっちにはしないしこいつと俺で完全完結してやるんだっ。俺だけのV・V・っ……！

想いは一つ。互いをどこまでも深く愛する気持ちだけ。

『ん、んん……んん』

互いを深く愛し合うV・V・と玉城は、愛し合うが故にどちらからも唇を離すことが出来ずにいた。

こんなにも互いを愛し合っているのに離れて良い訳がないのだ。

夕飯のこと、団らんのこと、これからの時間のこと、もうそれらは全てどうでも良く

なっていた。

この後も、明日も、明後日も、ずっと永遠にV. V. と玉城は互いを愛し合うのだから。他の事なんて全てが全て些事では無い。

もつとキスがしたい。

もつとずつと口付けを交わしていたい。

終わらせてはダメだ。

終わりにたくないのだ。

愛し合う二人は二人の完結と新たな始まりを感じ入りながら。

数十分という長きにわたって愛に溢れたキスだけを、強く優しく静かに繰り返しているのだった。



玉城と二人、楽しく缶酎ハイを飲んでいたV. V. の手が止まった。

「もう何年にもなるね」

「どしたよ唐突に」

「ん？ 思い出していたんだ。僕と真一郎が初めて愛を交わした日のことを。あの時の



口付けは僕の永遠の想い出なんだ」

アルコールの入った吐息を漏らしながら呟いたそれは、玉城との出逢いから愛し合う間柄となるまでの出来事について。

それを懐かしみ思い出していたのだ。

もう何年も前、出逢って間もない頃。愛を交わし合った日のことをV・V・は懐かしげに振り返っていた。

「あく、あん時なあ。あの時あ焦ったぜ。好きだって伝え合ってからいきなりキスしてくれとか言い出すもんだから」

「あははっ、僕はこう見えても積極的に動く方だから我慢が出来なかったんだ。愛し合ってるんだもの、キスしたいって思うでしょ?」

照れて赤くなった頬。けして酔いでの赤では無い薔薇のような赤。

V・V・の顔色を目にする玉城は俺もと言う。

「あん時キスして良かった。俺もすつげえ幸せな気持ちだったし……、V・V・の唇も気持ち良かったし……」

V・V・に取り最高の想い出は、玉城に取っても最高の想い出だった。

しかしそれはまた新しい日々と、日々の完結とを繰り返す中では想い出の一つとして記憶に刻まれた愛の一步に過ぎなかったのだ。

二歩目、三步目と踏み出して、歩いてきた愛の軌跡はもう何km何十km、幾百幾千kmと歩き来たのか分からない程に二人の中で紡ぎ上げられてきたのだから。

「なあV. V.」

「なんだい真一郎」

飲みかけの缶酎ハイを近くに置いて、玉城はまたもやV. V. の小さな身体を抱き締めめた。

「俺たちこれからもずっと一緒だからな。いつでもキスして、毎日愛し合って、毎日楽しく二人で歩いてくんだけ」

腰より下の踵まで届く部位の金色の髪の毛が畳の上に渦を作りながら散らばっている。

表地と裏地、黒と紫、二つの色を持つマントの裾が扇状に広がっている。

そんなV. V. を抱き寄せ、彼の髪の毛を優しく触り、撫でてあげながら、玉城はV. V. に口づけた。

「んっ——」

不意の口付け。これを受けたV. V. の紫色の瞳が少し見開き、そして潤う。

ああ、そうか。僕らは半身なんだ。身体を重ね合わさずには居られない者同士なんだ。

どんな時だって、何時だって、互いを触れ合わせずには居られないんだ。だから愛し合ってるんだ。真一郎に愛されるといつも幸せで満たされるもの。唇に湿り気を帯びた温もりを感じながらV・V・は玉城の抱擁を受け入れる。

「ん、んん——」

互いの唇から零れ出る口付けよりもたらされた呻き。どちらかと言えば口付けを受ける側となったV・V・の声の方が大きめに聞こえる。

愛し合い、完結し合う二人のキスは愛と共に儀式めいてもいた。

永遠に一緒に居ること、共に完結し共に朝を迎え、新しい扉を開き続ける。

そうして二人で一緒に生きていく為の無くてはならない愛の時間。

息を吸うように、吐くように。互いの唇を通して空気を送り合い、静かで優しい口付けを味わう。

酒を酌み交わしている最中の為にお酒の匂いが鼻につくが、それすらも互いが触れ合わされているのだと強く感じて愛おしい。

啄み合わせ擦れ合わせる唇が気持ちいい。

もつと欲しい。もつとだ。真一郎を感じたい。

僕を感じて欲しい。僕を感じて僕を真一郎だけの物にして。

そんな想いを愛に載せて玉城へ届けるV・V・の唇。

「ん、あむっ、ちゅ、んんうっ」

ちゅくちゅくと、唾液が混ざり合わされ。次第に舌を絡ませ合う深いキスに移り変わっていく。

ここまでするつもりは無かったのかも知れない。唇を触れ合わせるだけで終わりだったのだろう。

ただV・V・と玉城は愛し合い完結する間柄。ひとたび手を出せば行為がエスカレートしてしまうこともやむを得ないのだ。

V・V・からキスを求める事もあれば、今のように玉城からキスを求める事もある。それがキスだけでは終わらずそれ以上の求め合いに進むことは日常的だった。

僕らの、俺たちの関係は自分たちであつても止められない。

止めてはいけない関係なのだから。

「んっ、んんっ、しんいちろっ、あむっ、キミは、んんっ、キミは僕の物だっ、んっ、僕だけのんんんっ」

「あむっ、んっ、ぶい、っー、V・V・っ、あむっ、お前は俺のモンだっ、ん、ちゅっ」  
「そ、うだよっ、んっ、僕はっ、あむ、真一郎だけのっ、んんうっ、物なんだ、よ?」

V・V・は片手にしていた缶酎ハイが手から離れるのを感じた。玉城からの愛を受けている前で他の何かを手に行っているのは無粋だと。

上手く畳に落ちた缶は運良くも倒れることも転ぶこともせず立ったままだった。そうして幾分過ぎた頃か。

体感時間としては十分以上口付け合わされていたようにも思える唇が静かに離れた。つゝ、舌を絡ませ合う事で混ぜ合わされたV・V・と玉城、二人の唾液が唇の間で銀の糸を伸ばす。

「はあ、はあ、んっ……キス、気持ちいいね……、僕、真一郎にキスをされるの大好き」頬を薔薇色に染めたV・V・ははにかみながら想いを伝えた。

「ふうっ、へへっ、可愛いこと言うなよなこのお」  
ぎゆう。優しくだが少し強めの抱擁は玉城の照れと嬉しい気持ちの表れ。

玉城の指が優しく食い込むV・V・のマントの生地がより深く皺を刻んだ。

「ふふ、照れ隠しに僕のこと抱き締めるだなんて、キミンこそ子供っぽいよ真一郎」

「へ、子供みたいな身体してる癖に俺の親父より年上のV・V・から見たらどうせ俺なんか子供なんだろうよ」

言いながらV・V・の背を抱いていた手でV・V・の髪を掬い撫で、彼の流れるような金髪に指を梳き通していく玉城。

彼の五指の間を滑り抜けていくV・V・の髪の毛は、その彼自身の体躯と同じくらいの長さがあったて、畳の上で渦を巻いている毛先までを指で梳き通すのに中々苦勞する。

でも柔らかい極上の絹のような月の色に近い金色の髪の手触りは素晴らしく気持ち良くて、いつまでも撫でていたい気持ちにさせられるのだ。

「馬鹿だなあ、僕らは永遠に完結し合い歩いて行く愛し合う仲間じゃないか。真一郎のこと子供として見たことなんか無いよ。キミは僕の愛する人だもの。僕はキミだけの物なんだもの」

自分の髪を撫でられるそのお返しとばかりに、V. V. の小さな紅葉のような手が玉城の頬を撫で摩る。

自分と同じように上気し赤くなった頬は酔いの赤とは違う、愛の証の朱であると信じたいと優しく静かにすべすべと撫でてあげた。

お互いに愛をささやき合いながら触れ合う二人。

幼い少年の姿でありながらも老成されたV. V. と、一端の青年となった玉城真一郎。

完結された仲であり、永遠の愛を誓い合った仲。そして今という新しい時間を共に歩く二人は。

身体を触れ合わせたままで缶酎ハイを取ると。

「真一郎に」

「V. V. に」

## 『乾杯』

そうして夜の深酒を続けた。

「しかしすげえな」

「なにがだい？」

「いやさつきお前とキスしてたとき、お前の持っていた缶酎ハイ畳に落ちたのに倒れもしなけりや、零れもしなかったからさあ」

確かに。言われてみればV・V. のてにしていた缶はストーンと落ちて立つたままだった。

中身の一滴さえも零れずに。

「ギアスの影響かも知れないね」

「ギアス？ お前のくれたあの例の超能力みたいなのか」

「そう」

V・V. は玉城と愛を確認し合ったあの日、玉城にギアスの力を与えていた。

それは玉城が何らかの危険やトラブルに巻き込まれたときに、僅かながらでも助けに

なればと思ひ与えた力だった。

「でも、俺のギアス微妙だろ。あんなんでも発動すんのかよ」

「あんなのつて、でももしキミのギアスの影響が無ければ今この部屋の畳はお酒で濡れているところだったんだよ？」

「まあ、そりやそうだけだよ。なんか微妙だな」

「考え方次第だね」

玉城真一郎に発現したギアス。それは言わば幸運のギアスとでも命名すべき力であつた。

発動条件は無意識の下、危険や危機が迫れば幸運値を増幅させて自身と自身の周囲ある程度の範囲を幸運で守る様な、そんな力であるらしいのだ。

「キミにとつて危険がつきまとうゲットーや疎開内部では結構役立つてるだろう？」

「まあ、な。色々と危ねー状況でも助かったりしてきたのは俺のギアスのおかげなのもな」

「自分と周りの幸運値を上げるなんてある意味では奇跡を引き寄せる事にも繋がるから僕はキミに相応しい力だと思ふよ」

自分たちが幸せに生きていく為にも有用ではないだろうか。

そう伝えたV・V・は。



「俺の幸運は全部 V・V に使いたいぜ。V・V が危ないときにでも役立てられたら良いなって思うんだよな」

愛する想い人である相思相愛の玉城からそう返されて、嬉しくて自然、顔がほころび。幸せいっぱい満面の笑顔をその相貌に浮かべながら V・V は恥ずかしそうにしていた。

「ああ、もう幸せ者だな僕は。こんなにもキミの愛を受けられてるんだから照れちゃうよお。幸せだよ真一郎。僕はキミと二人いつまでも一緒に居られるだけで何も要らないからもう十二分以上に幸せなんだ」

「ラツキーのギアス無しでも幸せを掴んでる俺からしたら貰いすぎかもなあ。V・V が俺の傍に居てくれたらそれで幸せなんだからよ」

「ふふつ、なら真一郎。これからもつともつと幸せになっていこうよ。僕のこと幸せにしてよ」

「よし、任せとけ。V・V も俺も一緒に完結して一緒に始まってずっと幸せで在り続けような！」

「うん。僕らは二人で完結して二人で始まるんだからね。ずっとずっと永遠に」  
愛する二人、V・V と玉城真一郎。

完結された二人の在り方は今日もまた新しく始まるのだった。

## 僕からキミへ

僕からキミへ

玉城真一郎とV・V；二人の付き合いはそれなりで十年近くに成り、気安い間柄。

なのだが、いつも玉城がV・Vに迷惑を掛けるといった一方的な関係でもあった。

「ストロングストロングー！いえー！」

今日も今日とてストロングチューハイ。適度に強いアルコールと、その飲みやすさに定評がありながら、かなり癖になつてしまふ、良くも悪くも酒飲みの味方。

その500m缶を既に四本開けて尚要求中なのだ。この玉城真一郎という男は。

「悪酔いしちゃうよキミ。というよりもうしてるか」

「いいんだよ！どーせ明日はお休みなんだ。休み前の夜くれー飲ませろっつーの！」

「これ、僕が買ってきたんだけどさ。僕のお金んだけどわかかってる？」

「いーじゃんいーじゃんつ、かてーこと言うなよな、俺たち家族、夫夫（ふうふ）なんだからよー」

夫夫（ふうふ）夫婦（ふうふ）ではない、夫夫という間柄に二人はあった。

男と女では無く、男と男で夫夫なのだ。婚姻関係にある二人。そう玉城とV・V・は結婚しているのだった。

勿論誰かに認められた物では無い。お役所も男同士の婚姻は認めない。二人が二人、互いに相手を想い二人だけで結婚したのだ。

二人の関係を知っている者も、この特殊な夫夫関係にある玉城真一郎とV・V・の事を、心から祝ってくれて、ささやかな結婚式をこのゲットーの片隅で挙げてくれた。

祝言を済ませた二人のその夜の営みは、互いに一糸まとわぬ姿と成り、肌と肌を合わせ、じつくりと穏やかに時間を掛けた物で。

互いを想いながら深く深く、抱き合い、愛し合った物だ。玉城はV・V・を愛し、V・V・は玉城を愛し、二人は二人だけで完結する。

毎日、毎夜、そうして愛を紡ぐ。男同士？ 外見年齢が100つほど実年齢還暦ほどのブリタニア人美少年と、二十代の野性味溢れた日本人青年？

だからなんだというのだろう。愛するという事に、愛し合うという事に壁など有りはしないのだ。互いが互いを想っていればそれでいい。

ただ、V・V・は玉城にも話しているが。玉城に隠し事をしたくないから話しているが、V・V・は永遠の命を持っている。

そしてギアスと呼ばれる超能力を発現させることが可能となる力を、他者に与える事が出来る。

このギアスは玉城も持っている。

玉城のギアスは幸運のギアス。発動条件は無意識の下。

危険や危機が迫れば幸運値を増幅させて、自身と、自身の周囲ある程度の範囲を幸運で守る様な、そんな力であるらしいのだ。

この力はギアスの効かないV・V・Vにも間接的に効力を発揮する非常に便利な能力なのだ。

そんな便利な力の先にV・V・Vは玉城にもコードを保持させようとしていた。もちろん打ち明けている。

永遠に生きるV・V・V。寿命のある玉城。いつかくる死という別れ。V・V・Vは叫んだ。耐えられないんだ真一郎の居ない世界なんて!! この叫びに玉城の胸は高鳴り激しく揺さぶられた。これは、駄目だ、と。

だから一緒に、永遠に生きようという言葉に彼は肯いた。その為にまずは日本を拠点とし、世界中の遺跡を風潰しに回って。またコードの研究も行いながら、玉城のコード保持を目指す。これが二人の目標となる。

玉城自身は別に寿命が来ても良かった。人間いつか死ぬし、生きてるって事はそんな

もんだと割り切っている。しかし、しかしそれがV・V・を永遠に悲しませることに繋がる、繋がってしまうのなら話は別だ。

それだけは、それだけは楽天家の玉城真一郎も耐えられなかった。愛するV・V・を。心の底から愛し想うV・V・を悲しませるなんて、許されることじゃないし、とても耐えられる事じゃ無い。

玉城真一郎にとって、V・V・を悲しませることは、悲しませてしまう事は、唯一絶対の禁忌。犯しては成らない罪。あつてはならない事。

だから玉城はその永遠つて奴を目指してみることにした。V・V・と二人一緒なら、いつかそこへと辿り着ける、そんな予感を抱いて。

そんなV・V・を愛する志高い男、玉城真一郎だが、今はただの酔っ払いと化していた。

「うめエっ！ V・V・ もう一本！」

「はあ、まあいいけど」

ほら。小さな手がスーパールの袋の中に入れられ、掴み出された500m缶を手渡す。

「センキューー!!」

受け取る大きな大人の手。実際は小さな手の方が、大きな手よりも四十ほど年上だと

いう、不可思議な状態なのだが、特に二人とも気にしていない。

共に相手をよく知っているからこそその気安い間柄。玉城も目の前の美少年が、どうして六十代のおじさんか知っているから、今更訊いたりもしなかった。

男と男、愛し合う夫夫、それで十分なのだった。

「よし、V・V。も明日は何にもねー！つーことで俺様に付き合えー！」  
「いたつ」

額を小さな頭のその額に押し付けながら、玉城はぶしつと開けた缶チューハイをV・V・に差し出す。

「痛いよ」

おでこをさすりさすり、恨めしそうに玉城の両目をにらむV・V。の紫色の双眸。

「いたかねーって、ほら」

玉城がV・V。のおでこを触り、小さなその額をさする。

「……というか明日も僕には家事があるんだからね」

「俺と一緒にやろうぜ」

「真一郎だつて、真一郎と一緒に家事をすると直ぐにキスしてきたり、胸元とかあそことか触ってきたりして邪魔するでしょう？」

「お前だつて俺のキス受け入れてくれるし、身体触らせてくれて文句言わねーじゃんか」

「言うわけ無いだろ……愛してるのに……」

玉城の手で擦り付けるように額を摩られ続けるも、美少年の姿をした還暦ほどの男は拒絶しない。

そのままの勢いで玉城は、彼はV・Vの小さな身体を真正面から抱き締めた。

「へへーっ、ちっさいV・V、ちっさくて可愛いなあ」

「んんーっ、苦しいんだよ、もう……っばか、小さくて悪かったね」

玉城の羽交い締め)V・Vのマントが皺を刻む。

髪留めで整えている髪も少しくしゃつとほつれてしまう。

「真一郎キミ飲み過ぎだよ……また僕がキミの介抱することになるのかなあまったく」

V・Vも深く愛する玉城の背中に手を回して、V・Vから見ればその充分に大きな身体を抱き締め返してあげた。

一見、幼い子供が歳の離れた兄に抱き着くように見えても、実際は逆。二人の関係はさも不思議。

V・Vの手が玉城の背中をさすり、玉城の手がV・Vの背中をさする。

玉城の手の平にV・Vの表が黒で裏側が紫色をした、夜の色を連想させるマントの生地が擦られて、結構手触りが良い。

またV・Vの月の色のような美しい金色の長い長い、V・V自身の踵にまで届く

長さの長い髪の毛が手の平をさらさらこすり来て、これもまた気持ち良かった。

変わってV・V・の手には身体を包む黒いシャツの感触と、彼のその筋肉質な身体のためまじさ、自身には無い男らしさをよくよく感じられて心地良かった。

「V・V・は俺様の介抱係ーっ、うーん、それもいいんじゃないか？身体ちつちやいから細かく介抱出来るって言うかあ、なーなーV・V・ー俺の事介抱しておくれよー」

「うーん、そんな可愛らしい事言われちゃ断れないじゃないかー、真一郎う、可愛いよ真一郎」

言いつつV・V・も膝立ちのままに玉城の頭を優しく撫でた。身長差はある体格差もある、だが愛し合う夫夫が愛を伝え合う障害とはならないのだ。

逆立てられた茶髪の短髪。その触り心地が良い。わしゃわしゃしてあげるともっと良くて、暫しV・V・は玉城の頭を撫で続けた。

「真一郎、可愛いよ……僕の、真一郎……」

可愛い可愛い年下の、我が儘な夫は、本当に世話の焼き甲斐があった。

抜けているところが多いからこそ、その短所を夫である自分が埋める。

夫夫そうやってこのゲッターで生きてきた。

「それより忘れないうちに渡しておきたい物があるんだ」

世話の焼き外のある青年夫に外見年齢美少年夫は、少し離してと言う。



玉城は「やだーっ」と駄々をこねたが、離して貰わないと渡せないからと窘められ、ようやくV・V・の背を撫でていた手を離れた。

「ちよつと待つてね」

美少年の後ろ姿を玉城は目で追う。早くこの腕の中に戻ってきて欲しいと。

ガサガサ。袋をあさる音。V・V・の、彼の小さな手が、台所に置かれていた紙袋をあさっているのだ。

六畳一間のこの部屋では台所も丸見え。よく料理を作ってくれるV・V・の可愛らしい後ろ姿に玉城はほっこりさせられ、また抱き着いたりしたくなるのが良くある。

料理をするときのV・V・は長い長い金髪を首の後ろで一つに纏めて、三角巾を付けていたりする。マントも脱いでいるから、白と蒼に金縁を混ぜ込んだような、不思議な司祭服みたいな服で料理をする。

正確にはその衣服の上から白いエプロンを着けてだ。これがまた可愛らしくて玉城の庇護欲と情欲の中間の欲情を煽るのだ。

そんなV・V・に抱き着き、料理の邪魔なのにキスをして、五分くらいは口付け合わせて彼の邪魔をしてしまう。

『も、もう、……ばか、んんっ』

うつむき加減で頬を赤らめて抗議するV・V・が可愛くて、更にキスをしてしまうこ

とも。

くちゆくちゆと交わる唇の間から、つーつと唾液が漏れ零れ、V. V. の、玉城の、顎を伝いお鍋の中に落ちてしまったり。

そんな事が良く行われている台所。そこで紙袋をあさって彼は何をしているのか？ そんな事より早くこっちへ戻ってこい。もう一回抱き合おう。まだキスをしてねーじゃんか。

うざうざする玉城を後ろ目に。

「あつたあつた。一番下まで落ちてたみたいだね」

嬉しそうに微笑むV. V.。頬は真つ赤に染まっている。愛し合うときのように。口付けを交わし合う時のように。

「えへへ。真一郎く、はいっあぐげくる♪」

実際に恥ずかしく照れくさかったV. V. が、玉城に渡したのは。

「はー、と?」

「うん、ハート——だよ♪」

ハートの形をしたチョコレートだった。

「えへへ、受け取ってよ真一郎、僕の愛のチョコレート。愛のイベント忘れてたでしょう?」

夫夫関係なのだ。愛し合う関係なのだ。愛のイベントに参加するのは必須であった。き、今日、近くのあばら屋に住んでるおっさんが、V・V・V。ちゃんからいいもん貰える日だなあ。羨ましいこってって、言ってたの……あゝっ！ 今日だったのかあゝっ！！

玉城は酔いの回る頭を両手で抱えながら、目線を差し出された赤い色の包装紙に入った。真ん中だけ見えるハート型のチョコレートに。

「ぶ、V・V・V。っ！」

涙を流して大きさに。いや愛情深い故に涙を流して喜び、両手を差し出し、V・V・Vの小さな両手からそれを受け取った。

「えへへ」

はにかむV・V。今日一番のドキドキだった。どうせ忘れているだろうという事は察していた。だから、どんな反応を見せるかと少し不安だったが。

泣いて喜んでくれたのだ。こんなに嬉しい事は無かった。自分自身にとっても最高のプレゼントだよ。そうV・V。は微笑んだ。

## 玉城のお誕生日と冒険の前の恥ずかしい話

玉城のお誕生日と冒険の前の恥ずかしい話

それはふとした思い付きから聞いてみた事が切っ掛けだった。

「あれ？ 真一郎。真一郎のお誕生日って確か3月3日じゃなかったっけ？」

日々の家事と、疎開での情報収集や、探索の忙しきでつい忘れてしまっていた玉城真一郎の誕生日。愛する夫の誕生日だからこそV・Vは忘れたことが無かった。

ただここ最近とはかく玉城の永遠の実現、コードの保持に向けての旅程を組んだりと忙しかつたので忘れてしまっていたのだ。夫失格である。

「ああ、そうだけだよオ。最近はV・Vも忙しかつたら。だから仕方ねーじゃん。いいよいいよ俺の誕生日くらい。来年もまた——」

と玉城が流そうとしたところを。

「駄目だよッ！ 真一郎のお誕生日なんだよ？ 皇歴2016年3月3日の真一郎のお誕生日は、今年だけしかないんだよ!？」

「ん、んな事言つたつてよオ、もう数日過ぎちまつてるし」

「じゃあ今日しよう!」

V・V・が無茶を言い出した。V・V・は基本的に冷静な男性だが、玉城と結婚し、彼と暮らす間に少し彼の影響も受けて、無茶なことをしでかしたりすることもあつたりする。

疎開内部で玉城と夫夫仲良く連れ立っているとき、「イレヴンが」と玉城の事を指し、吐き捨てた男の脛を蹴ったりするなどが良い例だ。

『僕の真一郎を馬鹿にするな小僧っ!』

愛する者を馬鹿にされて黙っていられない。それは玉城の無茶の影響と、玉城への深い愛情が為した行為なのだ。

『この馬鹿っつ、何やってんだっ!!』

もちろん玉城に抱きかかえられて、その場を逃げることになる訳だが。イレヴンがブリタニア人に手を上げたとなれば、それは厳格なる階級社会のブリタニアはエリアーでは許されない行いだ。

と云つて、やったのはV・V。ブリタニア人だ。しかも白い高級そうな服に、こちらも高級そうな黒いマント姿という、貴族を思わせる格好の。

この場合はV・Vの外見年齢も手伝つておとがめ無しなケースが多い。しかし、脛を蹴られたブリタニア人の男がV・Vに対して暴力を振るう可能性がある。

当然、玉城は愛するV・Vを身体でかばい怪我をする。こうなるとV・Vは自分の所為で玉城が怪我を負つたとV・Vが泣いてしまうのだ。

幸運のギアスが自動発動して事なきを得る事もあつたが、発動が不確定だつた頃はそれに頼り切ることも出来ない。よつてV・Vを泣かせてしまう結果が待つている事もある。

玉城はV・Vを泣かせたくない、泣かせないと誓いを立てている。その幾度となくあつた強い想いの連なりが、玉城のギアスを成熟した物へと成長させさせた。

今の玉城は両目にギアスを発現できる。自身の自由意志で使えるようになった。それは玉城の心と身体、V・Vへの純粹なる愛が起こした奇跡。

V・Vは、ギアスを与えて僅か半年以内で両目にギアスを発現できる様になるとは考えても居なかつたので、驚いていた。

玉城は玉城でばへーつとしながらそんなにすげー事なのかと首をかしげていた。

『真一郎の、僕への愛なのかなこれ』

『んーわからんけど、たぶんそうじゃねーかな』

『ああ、真一郎……好き。愛してるよ』

ちゅっ——。場所も考えずに重なる唇を、玉城は素直に受け入れながらV・V・を抱き締めた。

相変わらず表地が黒、裏地が紫色の、足首まで裾が届く夜の色を思わせるV・V・のマントが。

彼の白を基調とした宗教指導者のような法衣服と良く似合っている。

そのマントの表面を滑るようにして流れ落ちる、V・V・の踵まで届く月の色と似た金色の長い長い髪が煌めいて美しい。

俺の夫は、V・V・は、こんなにも綺麗だ。この綺麗な伴侶を俺は独り占めしている。なんて幸せな事で、なんて許されねーことなのか？ こんな美しい夫を独り占めにして罰が当たりそうだ。だが、こいつは俺のモンだよ。神だろうが仏だろうが誰にも渡さねー。

離れる唇。

でも、またその唇は塞がる。今度は玉城の側よりの口付けを以て。

『俺だけの、俺だけのV・V・……、愛してるぜ……ん』

『あむ、んっ、しん、いち、ろ……んんっ』

V・V・の紫色の瞳には、玉城の逆立つ茶色の髪が目に入る。彼は、真一郎は僕だけの物だ。この塞がれた唇は、真一郎が僕の物だという証なんだ。

紫色の衣服、青いジーパン、安っぽい彼の私服はとても貴族を思わせるV・V・の服装とは見合っていない。

61歳のV・V・と23歳の玉城。年齢でも見合わない。背の高さだって幼い少年な外見年齢のV・V・と、一端の大人な玉城とではかなりの身長差がある。実際は二人とも大人。V・V・に至っては老齡の年齢に達しているのだが。

この孫のような年齢の日本人の男の子は、この僕だけの物なんだ。誰にも渡しはしないし、二度と喪わない僕の半身。僕の大切な夫。神様にだって僕らを引き剥がせやしないさ。だって僕はもう真一郎無しでは生きてはいけないから。

何もかもがちくはぐな二人。そのちくはぐな二人の目線とピースが合う時。それが口付けの時だ。

瞳と瞳で通じ合って、腕と腕で抱き締め合い。唇と唇で熱い想いを伝え合う。

僕は真一郎を。

俺はV・V・を。

愛している。





「変な処に挿れたりしないよ。病氣になつて困るのは僕の愛する夫だからね。だからいつも絡ませ合つて擦り合わせ合うんだ。とつても気持ちが良いんだよ？ 真一郎は僕のと絡ませ合いながら、僕のものにとつても優しく擦り付けてくれるから僕はいつも感じちゃうんだ。それで、僕に優しくしてくれる真一郎に、僕も擦り付けてあげるのさ。擦り合わせて一緒に気持ち良くなれるのつて凄く幸せを感じるんだよ？」

V・V・は嬉しそうに惚気話であり、夫夫としての愛の時間を近所のおじさんに語る。それは本当に幸せその物で、男同士の話を聞かされているというのに、玉城のお誕生日に呼ばれていたおじさんまで幸せな気分させられた。所謂幸せのお裾分けだった。

「そうして達するときにはお互いに掛け合つたりする。絡ませ合つていたお互いの物に掛け合つて、身体にも掛け合つて。もちろん飲ませ合う事だつてある。どちらかが我慢して、大体は僕が我慢して先に真一郎のを僕が呑んでから、今度は真一郎が我慢していた僕の物を優しく握つてくれて、お口に入れて僕のを呑んでくれる。普通に毎日してる事だよ。だつて僕と真一郎は愛し合う夫夫だもの」

「ははっ、いいねえV. V. ちゃん！ 玉城くとラブラブだねえ！ おじさんまで幸せな気分になってくるよ。いやあ男同士の馴れ初めを聞いて気分良く酔えるのは玉城くとV. V. ちゃんだねえ！」

おじさんは愉快そうに笑う。このおじさん。玉城とV. V. のアパートの近所に住んでいて、二人の結婚式に出席した人の一人だった。結婚式と言ってもゲットーで行う質素な結婚式だったが、その時、V. V. は髪が長いのと容姿が美少年と可愛らしいのとで、白無垢姿で結婚式に臨んでいた。

玉城はV. V. の白無垢姿のあまりの綺麗さに呆然とした物だ。交わす杯を取り落としそうになったりして、「しつかりしろよ玉城！ こんな綺麗な旦那を貰うんだからよ！」「幸せにしてやれよー」とゲットー住民ならではの口の悪い野次が飛んだりした物だ。序でに誰もが美しいV. V. を玉城の嫁的存在としてみていたようだった。

「お、おい、V. V. ちゃん？ このおっさんになんで俺たちの愛し合う時間の話をしてるのかな?？」

玉城は焦る。

ストロングチューハイを六缶も開けてしまったV. V.。玉城のお誕生日と言うこともあつて愉快的気持ちで飲み過ぎていた彼は、とんでもないことをいきなり話し出したからだ。

そりや玉城とV. V. は愛し合う夫夫。やることもやっている。その際に不浄なことはしてないんだよと変な事に拘って力説し始めたのだ。

おじさんに分かつて貰いたかった。その一心で。別に相手も構わない。僕と真一郎は真つ当に愛し合っているのだと。

「キスはねエ。真一郎からしてくれることもあるし、僕からする事もあつてさあ、僕からする方が実は舌を絡ませ合わせてエ、真一郎の舌の裏をなぞるように舐め上げてねエ？ それで舌全体を絡ませてしつかりとふれあうんだよオ」

「こ、この馬鹿っ！ そんなことまで話すなっ！」

「エー？なんでー？」

「どんだけ酔つてんのV. V. よオ」

言い合う玉城とV. V. に、おじさんは別にいいじゃ無いかと止めに入った。

「いーよいーよ玉城くん。玉城くんのお誕生日にV. V. ちゃんも語りたんだよ。夫なんだから愛し合うのは当然だし、する事もして当然だよ。何も悪いことじゃない、愛の話で幸せな話だよ。おじさんも普段聞けない男同士の夫夫の愛の話を聞けて勉強になるよ」

「いや俺が恥ずかしーし構うつーの！ つーかV. V. は普段こんな話はぜつてーしねーんだよ！酒に吞まれて俺の誕生日って事でご機嫌になつちまつてるくっ!!」

「あはははは真一郎が二人居るうー。二人で僕を愛してくれるのオー?」

「俺は一人だよ馬鹿つ。おめーが飲み過ぎて目の焦点が合つてねーんだよ」

ふと立ち上がり。ふらふらと歩きながら玉城のあぐらの上に座つたV・V。

「つと、大丈夫かよお前」

「僕は不死身だーつつ!!」

「知つてるよ」

「にゆうう」

V・Vは散々惚気話と恥ずかしい話をぶちまけまくつた後、玉城のあぐらの上に座り込み、玉城の胸にそつと頭と身体を寄りかからせて、一人静かに眠つてしまった。

「つたく……あー、なんかわりイなおつさん。変な話とか、そのよ、性的な話まで聞かせちまつて。あー恥ずかしーわ……」

「別に構わないさ玉城くんとV・V。ちゃんが離れられないくらいに愛し合つてることがよく分かつたし、結婚式に出た身としては安心かなあ」

おじさんはワンカットプをくいつと呑む。

玉城は自分の身体に寄りかかつて眠るV・Vの頭を優しく撫で、長い長い彼の月の色の金髪を優しく愛撫する。

頭を撫で、髪を撫で、マント越しに背中も撫でてあげると。

「にゆううー」

と、よく分からない寝言を口にするV・V。実に可愛らしかった。

「来週からキュウシユウに行くんだって？」

おじさんが切り出す。

「正確にはキュウシユウから中華連邦入りして龍門石窟だったか言うところ行くんだってよ。その後はトルコか中東か目指す、またはロシアを目指すんだと」

「ずいぶんと長旅になりそうだねえ。危険も多そうだし。V・V。ちゃんは何を目指してるんだい？」

本当は秘密の話だ。だがこのおじさんは誰よりも信用できる。だから話した一部だけだが。流石に全部は話せない。それは玉城とV・V。だけの秘密の話だから。

「永遠……」

「嘘かホントか永遠だよ。おっさんは信じるか？」

「正直言うと思じられないな。V・V。ちゃんがおじさんと同じ年くらいってのは二人で話す機会も多いから知ってるけど。永遠かあ」

おじさんはワンカップの残りをぐいっと飲み干すと呟いた。

「いや、確かにV・V。ちゃんが永遠に生きるっていうなら少年の姿をしていることにも合点がいくよ。そして玉城くんにも永遠を求めさせようとするのも。V・V。ちゃ

ん、玉城くんがいなくなったら廃人になりかねないからねえ。V・V・ちゃんが生きて行くには玉城くんが絶対に必要なんだよ」

「そう、なんだろうな。俺もV・V・がいなくなっちゃったら、たぶん、自殺する……」  
「玉城くん……。君たちはあれだ。愛し合いすぎているんだろうな。そしてそれは今なお熱く深くなって行ってる。誰かがどうこうできることじゃないんだね。玉城くんとV・V・ちゃんの二人で暖めていかなくちやいけないことなんだろう」

「だろうな……。分かってる。俺も、V・V・も……。俺たちは離れられないんだな。永遠にさ」

玉城ははにかみ笑う。永遠に離れられない愛が育ってしまった。この何年もの間に。それがどうしても嬉しくて。

「明日、V・V・ちゃんが起きたら今日の続きをしよう。飲み過ぎないようにしてね」  
三人で語り合いたい。玉城とV・V・、愛し合う夫夫の出逢いから今までを二人の口よりもう一度聞いてみたいとおじさんは言う。

二人が暫くの間、日本を離れる前に。

二人が永遠を求めて冒険を始める前に。

## 柏餅&amp;愛し合う 一路キユウシユウへ

柏餅&愛し合う 一路キユウシユウへ

「わり、V. V.。ちよつと待つてくれよ」

茶髪の髪を逆立てた青年、玉城真一郎に電車の座席に置き去りにされる。踵まで届く淡い月色の髪の少年。少年の姿をした齡六十代の男性なのだが、その男性は表地が黒、裏地が紫のマントを羽織り、白を基調とした青や金の色が入った宗教指導者のように衣服を着ている。

だから目立つ。一人にされていると狭い列車内を行き交う人々にじろじろ見られる。地元であるシンジユクゲッターでならこんなことは無かった。

みんな温かい目で見えてくれるし、自身が六十代の大人である事を知っている者ばかりだから、年上への接し方で接してくれた。だが、一步地元を離れば、貴族のような変わった衣服を着たブリタニア人の子供としてしか見られないから一人にされると非情に気分の悪い思いをするものだ。

貴族と勘違いして取り入ろうとしてくる馬鹿まで出てくる始末だ。

特に玉城と僕の間柄、夫夫関係という間柄を知らない者からしてみれば、ふとした僕と玉城の、真一郎の行為が気持ち悪く映ったりするのでろう。露骨に変な顔を向けてくる。

嫌なら見なければ良いのに。気持ちが悪ければ視界に入れなければ良いのに。僕は余り気にしない方なんだけれど、それで真一郎が傷つきでもしたら多分辺り構わず怒鳴り散らす。僕よりも年下の糞ガキ共が、僕の大切な真一郎の事を良くも傷つけてくれたなって。

まあ、幸いにも真一郎も気にしない方。自嘲気味に俺の脳みそは2Bitだから、物事深く考えられねーのよ。そんな事をよく言っている。だけどね真一郎、君は僕を、僕の事をこんなにも愛してくれている。僕も君をこの小さな身体で精一杯愛している。

夜、ううん、昼でだってどこでだって僕たちは性愛行為だっしてしているじゃ無いか。

君のを口に含み、僕のを口に含まれ、互いに達して吞ませ合ひ、身体を擦り寄せ合ひ、肌と肌で感じながら、大切なところを絡ませ合わせて達する。これは形だけの夫夫愛だけ、心と心で深く一つに繋がらあつて証拠なんだよ？

僕はそれが嬉しい。僕の愛を受け入れてくれて、君の愛を受け入れるんだ。ゲッターのお隣さんなんかには昨日の夜は激しかったねなんて恥ずかしい事も言われたりする



けれど、それさえも僕には嬉しいんだ。ああ、早くこんな旅は終わらせて、あのシンジユクゲツトーのあの家に帰りたよ。

そして帰ったその日は僕と真一郎は一日中を以て愛し合うんだ。僕らが結婚して夫仲にあるのを知っているのはあのゲツトーの住人達だけだからね。あそこは僕と真一郎の地元。故郷なんだよ。彼処で僕と真一郎は出逢い、そして始まったのだから。

それにしても何してるんだ？ 遅いなあ。電車出ちやうぞ。

と、思っていると、逆立てられた茶髪のいかにも俺不良なんだぜってのが飛び込んできた。

「わりーV・V。一人にしちまってよ。寂しかったか？」

「寂しかったよ」

ああそう、寂しかった。君のいない時間はいつだって寂しい。僕にとって君という存在は僕の生きる全てなのだから。

「そっかあ〜ごめんな〜」

真一郎は人目も幅からずに僕の事を抱き上げてくると、強くハグしてくれた。僕も小さな手足で真一郎を抱き締め返す。長いマントの裾と、僕の長い髪が翻りゆらゆら揺れている。

「終点の次の駅で降りるからそこからは歩きか、ヒッチハイクだろ？ 万一遅れたら駅

で待つててくれるだろうって」

「僕を待たせたら、V・Vの真一郎寂しん坊病”を発症して五秒で死んじやうからね」

嘘じゃ無いよ。僕は真一郎がいないと寂しくて死んじやうんだ。

「な、何だよその病気は」

「僕が作った」

「勝手に作んなつ！」

見ると手に何か持っている。

「何か買ってきたの？」

「おうこれか？へへつ、こんな田舎ならまだ日本の風習も残ってんじやねーかなーと思つてさ」

そういつて僕を降ろし、座席に座らせてくれる。二人で向かい合わせではなく、隣り合わせで身体をくつつかせて座りあって僕と真一郎は強く引つ付くんだ。

真一郎は袋に入っていたビニールに包まれた緑色の葉っぱを取り出す。

「なにこれ？」

「柏餅つーんだ。葉っぱの中に餅が入つてるんだぜ。男の子の節句つて奴の時に食べるんだよ」

男の子の節句ねえ？ 僕は大人の男だ。結婚もしてる成人男性なんだけど。

「舐めてんの僕の事？」

「舐めてねーよ。まあまあそう怒んな。六十代のおっさんがガキ扱いされたらそりや怒るだろうが、ほら、ブリタニアにはない風習だろ？ だからV・Vにも味わってみて貰いたかったんだよ」

そういうことか。うん。まあいい。それならば許そう。

「葉っぱ事食べるの？」

「いやいや、葉っぱは無理。桜餅なら行けるだろうけど柏餅は無理だ。とりあえず葉っぱ剥いて」

「こう、かな」

僕の小さな手の指が、お餅の葉っぱを剥いていくと、現れたのは。白いお餅。甘い良い匂いがしてるね。

「そんでまあ、普通に食べる」

見本でも言うように、もっちゃもっちゃ食べ出す真一郎。

僕も食べてみる。

「もっちゃもっちゃ、ん、中に餡子が入ってるんだね。もっちゃもっちゃ」

「美味しいか」

甘いお餅に甘い餡子が見事にマッチングしていてとても美味しい。

僕は自然笑顔になると、真一郎に顔を寄せた。

「うん、美味しいよ……君の唇には劣るけれどね」

周りの視線なんて気にしない。だって僕V・V・と玉城真一郎は、誰憚ることの無い夫夫だもの。

◇

「おお、お熱いね〜お若いの」

僕と真一郎が口付けを終えて、ふと前を見ると如何にもな老紳士が座っていた。物わりの良さそうな人で僕らの関係にも理解を示してくれている。僕が真一郎にキスをした瞬間。隣の席のブリタニア人カップルが「おえーきも〜」って言ったのとは偉い違いだ。

「僕と真一郎は夫夫だもの。熱いのが普通なんだよ」

「お前が必要以上に愛情表現を要求してくんじゃねーかよ」

「嫌なの？」

「んなわけねーだろ……んっちゅ」

隣のカップルが。

「げー、キモいまたヤツテル、しかも相手イレヴンだろ気持ちわりー」

とか言ってるのが聞こえるけど、眼前の紳士は。

「仲良き」とは美しきかな。性別や種族なんてのは、愛の前には関係ないんじやよ」

と僕らの行動を美しいと見てくれて。

僕の気分は高まり、舌で真一郎の唇をこじ開けて、舌の中に差し入れ、真一郎の舌と絡ませ合うディーブキスに移行した。隣のカップルは「おげー」とかやって本当にゲロ吐いて車掌さんに怒られてる。いいざまだ。

身体も心も火照ってる。頬が熱い。真一郎の頬も熱い。目をつむってキスをする僕ら。いい加減離れようかと言うときに、発車ベルが鳴った。ベルを聞いてお互いに身を離す。

「お前いい加減にしろV。V。よお。ディーブキスまでしてくるとは予想外だぞ」

「いいじゃないか。夫夫関係に遠慮なんか要らないよ。ねえおじさん」

僕は前席のおじさんに聞いてみる。

「まあ、場所は選ぶ必要はあるかもしれないが。こんな列車の三人しかおらん客席なんじやし、かまわんのではないかな。それよりあんたらこのさき終点なんじやが行く宛てはあるのか？」

おじさんが尋ねてきて、真一郎が答える。

「いや、宛てはねー。とりあえずキュウシュウを目指してんだけど」

真一郎の言葉を僕が引く次ぐ。

「僕らはキュウシュウから中華連邦に渡る予定なんだ」

「中華連邦、大陸まで?! そりやまた偉い長旅じゃなー、んーお二人さえ良ければくんばんは儂の家に泊まつていかんかね。こんな田舎だけになにもないところだが、まあ酒ぐらいは出せるよ」

とまあ、そんなこんなで、旅を始めてそれほど経って居ない頃、第一の宿を見つけた。ついでにここぞとばかりに僕と真一郎は愛し合った。互いを口に含み、吞ませ、肌と肌を重ね合わせて、大切などころを絡ませた。

真一郎の身体に僕の月色の長い髪が纏わり付いて、真一郎は僕の髪を優しく撫でてくれて、僕が真一郎の耳朶を噛むと、真一郎も僕の耳朶を噛む。散々、愛し合い絡み合った僕たちは、裸のまま抱き合い、お互いの温もりに触れて眠りに就いた。